

令和5年11月11日

一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会
役員候補者選出委員会



令和6・7年度会長候補者選挙公報

投票の期間：令和5年12月18日～令和6年1月4日
開票日：令和6年1月6日

令和5年11月11日

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会
役員候補者選出委員会



令和6・7年度会長候補者選挙公報

受付番号 1



横地 常 広

(西暦1953年12月16日生)

<一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会>

略歴

平成24(2012)年5月～平成26(2014)年5月 理事
平成26(2014)年5月～平成28(2016)年6月 専務理事
平成28(2016)年6月～令和4(2022)年6月 代表理事 副会長

現在に至る

《立候補要旨》

スローガン 日臨技を再考し「会員とともに考え、会員とともに挑む」

臨床検査技師として、地域医療支援病院を中心に医療現場で勤務し、自身の専門性を磨くことに邁進した20代から30代。そして役職者となり検査部スタッフの意識改革と人材育成、業務の効率化や施設内での技師の地位向上、さらには他部署との連携強化に取り組んだ40代からのプレイングマネージャー活動。このような36年間の経験と日臨技執行役員（理事・専務理事・代表理事副会長／会長職務代行）として、2012年から2022年の10年間務めた経験を活かし、また、日臨技役員として培った多方面（政府与党議員、厚労省、医師会等専門職団体、病院団体、日衛協、臨薬協、患者会など）にわたるネットワークを駆使し、臨床検査技師が将来に渡って活躍できる場を維持すること、さらには新たな働き方が実践できる環境を整えることに残りの人生をささげる想いです。

全ての会員の方々の声に耳を傾け、出来るだけ多くの会員のもとへ自ら足を運び、会員と顔の見える関係性を築くことで「日臨技を新生」させます。会員の不安、ご意見を真摯に受け止め「会員とともに考える」日臨技の実現。大きく変わりはじめている医療環境に対して「会員とともに挑む」という気構えを持って役割を果たす決意です。会長候補者選挙に立候補したいと思います。

(具体的な取り組み)

1. 会員が抱える不安抽出の仕組みづくり「臨床検査でつながる場」

職場は人生の大半を費やす非常に重要なコミュニティの1つですが、その場だけでは抱えきれない課題がでてきます。そして、医療現場で抱える「不安」や「思い」を意見交換、情報共有できる「場」があまりに少ないと感じています。

これに対して、都道府県技師会と連携して、施設外の同世代が「集い」情報交換できる環境を作るこ

と、世代別（新人、中堅、管理職）で「場」を設定し、共通課題を通して情報共有し、解決に向けた糸口を模索できる「場」を支援したいと思っています。具体的には、日臨技執行役員と支部長により事業計画を検討し、事業目的を明確にした上で、支部ごとに、意見交換、情報共有できる世代別の「場」の企画、運営する委員会（各都道府県技師会1名）を設置し検討することを目指します。

2. 「検査データの品質保証」を担うための卒後教育と生涯教育研修制度の構築

臨床検査技師に求められている重要なものの1つが「検査データの品質保証」です。日進月歩で社会が変わり、技術革新が進んでいく中で、臨床検査技師もこれまでの知識だけでなく、新たな知識と価値観、スキル・ノウハウを持って、個人として臨んでいく必要が出てきています。

これに対して、会員の卒後教育という視点では、都道府県学術部門協力員（各研究班班長）、支部学術部門長、支部学術部長、日臨技学術組織が「意見交換できる環境を再構築」すること、各部門の独創性を確保した上で、都道府県技師会研究班、支部学術部門、日臨技学術組織の果たすべき役割分担を明確にし「一貫性を持った生涯教育研修制度」を再構築したいと思っています。また、「臨床検査技師の生涯教育ラダー」を作成し、キャリアパスと教育研修と医療機関内の役割を整理すること、加えて、研修会の実開催を軸に、web研修会、eラーニングシステムの活用も視野に、会員の「自己キャリアプランを支援する体制」を整えていきたいと思っています。

3. 日臨技支部活動（支部学会、支部学術部門研修会など）における事務作業負担の軽減を通して「支部活動の独創性」を支える

国内には幾つかの医療系職能団体がありますが、会員にメリットを感じていただけて、選ばれ続ける組織となるための共通項は、地域をベースとした活発な活動です。そのためにも、確りとした支部体制が不可欠なわけですが、現状では人材不足やノウハウ、資金的な観点から難しい場面が少なくありません。

これに対して、日臨技事務局体制を強化し、支部で開催される事業の「本部による事務的作業（予算・決算書類、講師依頼状・感謝状の作成など）の支援を強化」し、事業担当役員は企画、プログラミングなどに専念できる体制を作ります。「支部活動の独創性」をさらに発揮できるように、現行の支部学会、支部学術部門研修会の運営規定なども再構築を検討したいと思っています。

4. 都道府県技師会と連携した日臨技の組織力強化「全国会員7万人が一丸となって取り組むための体制

づくり」

これまで、日臨技では、行政が進める地域医療構想、医療費の抑制、少子高齢化に伴う医療環境の変化などに対する様々な施策、医師会など他の医療団体の動向を見ながら、職能団体として最善と思われる選択をしてきました。しかしながら、現状では、会員が職場内で抱える目の前の課題と日臨技が進める事業展開との間に大きな溝があるのではと感じています。

これに対して、実状と課題を確りと整理したうえで、日臨技として行う事業については、「決定に至った経緯（プロセス）を説明」し、会員に理解してもらう努力を惜しまないことを徹底していきたいと思っています。

日臨技とは別法人となっている「47都道府県の技師会との連携強化」に向けて、各地域で開催される理事会及び支部幹事会にできる限り足を運び、意見交換をし、各技師会の自治を尊重したうえでの協働する仕組みを作りたいと思っています。一人でも多くの会員と時間を共にして、会話をすることで、情報共有に努めることはもちろん、こうしたことの積み重ねなしでは、全国7万人の仕事に対する不安払しょくと組織力強化は望めないと考えています。

5. 養成学校と連携した「技師キャリアデザイン」と地方部における政策提言の支援

国立社会保障・人口問題研究所のデータでは、2020年から2040年に向けて、0-14歳の若年層人口は大きく減少し、この傾向は特に地方では顕著になります。その意味でも、臨床検査技師に興味を持ち、臨床検査技師になる学生を如何に確保していくかという課題があります。また、臨床検査技師の免許取得後に、医療現場で働く技師や企業で働く技師などキャリアの見えにくさの問題と、それに付随した優秀な人材確保も大きな課題となっています。

これに対して、臨床現場で働く臨床検査技師が多く所属する技師会としての持ち味を活かし、教育協議会と連携して、中高生向け、養成校学生向けに「キャリアプランを提供」する取り組みも実施していきたいと考えています。また、都道府県技師会が開催する「検査と健康展」に地元の教育委員会と連携して、臨床検査の魅力を発信するコーナーを設置し、中高生の進路の選択としてアピールすること、養成校学生に対しては、臨床検査技師として目指す将来像に向けた自己キャリアプラン設定を支援するなど検討したいと思っています。

6. 新興感染症対策等の「有事における実効性のある体制づくり」

この度のコロナウイルス感染症のパンデミックで

は、それに伴う検査体制の強化が行政主導で進められました。また、検査機器・検査試薬の増産支援、医療機関への検査機器導入支援が実施され、体制強化が進められたことで、臨床検査技師は医療機関内での感染対策、検体採取、抗原検査などの対応に追われることとなりました。一方で、外部に設置された発熱外来、検査センター、ワクチン接種会場への人員派遣要請にこたえることが難しい状況も多く発生し、非常時の機動性については別の課題も見えてきたところです。

これに対して、現職を離れた臨床検査技師を対象にした日臨技の「シニア会員制度」を新設し、人材不足とノウハウを繋ぐ取り組みを行うこと、地域ごとに「人材バンク」として新興感染症、災害時などに人材派遣できる体制づくりを検討したいと思っています。

7. 臨床検査DXから始まる「臨床検査の新たな働き方の創出」

品質保証された検査データを迅速に臨床に提供することで、医師をはじめとする医療従事者から「信頼される検査室」として評価されてきました。このように築き上げてきた「検査データの品質保証」の分野においても変化は目覚ましく、自動化、システム化、オンライン化、そしてAIの導入などの技術革新の波は今後ますます進んでいくことと考えられます。

これに対して、臨床検査技師としてポジティブに捉え、日常業務に積極的に取り込み、業務の効率化を進めることで時間を捻出することができるのではと思っています。これは、患者のそばで「治療の支援」を担う検査の専門家としての新たな役割に繋がると考えています。例えば、病棟や在宅、オンラインなどでの臨床検査技師の役割創出に繋がる変化です。このような新たな臨床検査技師の働き方に対する支援や研修などの検討も進めていければと考えています。

総じて、患者により良い医療を提供するメディカルスタッフの一員として、臨床検査DXを積極的に検討するべく「会議体の創出」と「産業界との共同開発や共同宣言」、「臨床検査DX人材」の育成体制を構築し、医療分野以外の専門家とも話し合うことで、凝り固まらないマインドで人づくりと仕組み作りに取り組むたいと思っています。

8. 「国民・地域住民に頼られる職種」としての発信支援

臨床検査技師は、業務の特徴から検査室内の業務に専念し、患者のそばで直接業務を担うことが多くないです。その弊害として、医療機関内の他のスタッフからの理解が乏しいケースや患者さんからは他の医療職種との違いに気付かれないことも少なく

ありません。一方で、臨床検査技師の業務を深く理解している医師や他のメディカルスタッフからは専門性の高さについて評価をされている現状があり、臨床検査技師は対外的なポテンシャルを活かしきれしていない部分があるのも課題となっています。

これに対して、臨床検査を「理解してもらう努力」を惜しまないことが重要と考えています。院内の他部署（カテ室、内視鏡室、救急外来、病棟など）で、患者さんの顔が見える場所で診療支援、患者の療養指導、疾病予防の指導に直接かかわることで社会的認知度は向上すると考えています。

そして、自身の得意分野、検査データの知識を他職種や患者さん、そして地域の方々に向けて「発信していくためのノウハウやツール」について、日臨技としての支援方法を検討していきたいと考えています。

9. 「政策提言機能の拡充」に向けての3つの方策

会員である臨床検査技師が10年、20年後の未来においても安心して仕事が続けられるよう、医療制度を所管する厚生労働省等の行政政府やそれらのルール作りを担う国会議員への働きかけを行っていくことが重要です。そして、このような政策提言機能を拡充するためには、臨床検査業界の声を直接届けることが可能な組織内候補としての国会議員を輩出する必要があります。しかしながら、現状では臨床検査技師を持つ現役国会議員は存在せず、政府への働きかけには力不足感が否めない現状です。

これに対して、2年後および5年後の国政選挙に「組織内候補」を擁立することを目指して、臨床検査技師連盟と連携して体制強化に努めていきたいと考えています。また、その体制強化に向けては、前述の通り日臨技に「シニア会員制度」を新設して、退職された先輩方の協力を得ながら、体制強化を支援いただく仕組みを構築していきたいと考えています。一方で、組織内候補として国会議員が擁立できるまでは、臨床検査に造詣の深い特定の「与党国会議員」を支援し、臨床検査業界の想いを確りと届けてもらうことで、政策提言機能を確保していきたいと思っています。

そして、政策提言においては、より多くの現場の声を反映した調査報告書や提言書が重要な意味を持ち、Evidence Based Policy Making (EBPM：証拠に基づく政策立案) という視点でもってデータの提出がカギを握っています。

以上の課題に取り組むために最も必要なことは、出来るだけ多くの会員のもとへ自ら足を運び、会員と顔の見える関係性を築くこと。そして、「会員に伝えるための努力を惜しまないこと」を自身の活動の「原点」に据えて活動をしていきたいと思っています。

ます。

私、横地常広は、会員の皆様方とともに、会員の顔が見える職能団体に「日臨技」を新生させたいと思います。立候補に当たり、詳細な内容については自身のHPを11月中旬に開設します。 (<http://yokochi-t.jp/>)



〈原文をそのまま掲載しています〉

令和5年11月11日

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会
役員候補者選出委員会



令和6・7年度会長候補者選挙公報

受付番号 2



長 沢 光 章

(西暦1958年1月14日生)

<一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会>

略歴

平成24(2012)年5月～平成26(2014)年6月 理事

平成26(2014)年6月～平成28(2016)年6月 執行理事

平成28(2016)年6月～現在 代表理事 副会長

現在に至る

《立候補要旨》

私は、職能団体として「**学術の強化**」と「**次世代へ繋ぐ**」を公約に、会員の皆様と共に新しい流れを作っていくために令和6・7年度会長候補者として立候補いたします。

急速な少子超高齢化時代を迎え、そして人口減少となっていく日本において、臨床検査・技師が社会情勢や技術革新による医療・介護・福祉改革の波に飲み込まれることがないよう世界にも目を向けて対応していくことが私の使命と考えています。

臨床検査技師の**職域確保**および**更なる職域拡大**に向け、新たな法整備を日本臨床検査技師連盟とともに関係官庁、関係団体および国会議員等へ働きかけて参ります。そのためには、**学問・学術と技能・技術あつての職域**と位置付け、**学術活動の再構築**および**活性化**に全力で取組んで参ります。また、少子化による学生数の減少による様々な課題に対応することや、**次世代の臨床検査技師の育成と世代交代**を加速し、**活気ある日臨技**にしていく必要があります。

私は40年以上にわたり臨床検査技師として、臨床（病院検査室）、研究（論文、学位取得）そして教育（大学教員）に携わってきました。そこで、日臨技微生物検査研究班全国班長としての活動や各種認定制度や研究会の創設と運営、韓国や台湾など海外検査技師との学術交流、多くの臨床検査関連学会や団体での役員歴などの活動で得た多くの経験、多くの仲間、そして信頼を武器に、**宮島喜文会長の意志を継ぎ**、私にしかできない学術の強化と次世代に繋げる夢のある日臨技活動を皆様と共に積極的に展開していきます。

1 学術事業の強化

1) 学術部門の再構築

従来分野別検査研究班を進化させた各支部および都道府県の連携による**分野別研究部門を全国組織へ再編成**し、支部を超えた北海道から沖縄までの部門間交流を活発にして、精度管理事業、認定制度事業、学会シンポジウム企画、専門学会などと連携を図り、研修

会の開催などによる検査法や標準法などの普及啓発活動を行っていきます。

2) 医療DX (Digital Transformation) 推進部門の創設

現在、急速に進歩しているデータリテラシー、AI (Artificial Intelligence)、ソーシャルメディアなどの活用による会員への新たな教育ツールとして、臨床検査領域におけるこれらの応用事例の模索と広報、精度管理事業や学術・教育関連事業への積極的な応用を検討し、対応する推進部門を創設します。特に、VR (Virtual Reality) を用いた研修教育コンテンツの作成やAI技術への対応は重要課題として推進していきます。

3) 関連学会・団体との連携と目標設定

臨床検査関連の団体・学会である日本臨床検査振興協議会、日本臨床検査医学会、各学術専門学会、日本臨床検査学教育協議会および経営母体別団体などとの連携をさらに強固なものとし、それぞれの学会・団体とはそれぞれに具体的な目的を持った連携や交流を行っていきます。

特に、学術専門学会とは認定技師制度を中心に対応していますが、標準化やガイド作成事業、学術集会における共催シンポジウムの開催など学術面における連携体制を強化し、日臨技の役割を明確にしています。

2 次世代への継承

1) 臨床検査技師養成プロジェクト (卒前・卒後プログラム) および学生会員制度の創設

少子化で学生数が減少する中で、臨床検査技師の養成校に多くの優秀な学生を確保することは喫緊の課題です。現在、個々の養成校の努力によって入学生確保を行っている現状ですがそろそろ限界にきています。そこで、私の教員経験をもとに日本臨床検査学教育協議会との連携による中・高校生との対話による臨床検査技師の魅力発信する事業を展開していきます。また、日臨技大学生・大学院生会員制度の創設などを積極的に展開します。

更に、若手技師で進めている未来構想WG、地域ニューリーダー育成研修会を拡大させ、包括した次世代臨床検査技師育成フォーラムを創設し、次世代で活躍する臨床検査技師を育成します。

2) 世代交代と制度の見直し

世代交代を念頭に、必要な事業は継続していきながら、次世代を担う人材育成に取り組み、更に技師会活動や運営に加わっていただくことにより日臨技の活性化を図っていきます。そのために、**役員70歳定年制と任期制の導入**、理事の役割の明確化と業務分担を行い、更に昨今の現状を鑑みて臨床検査技師としての倫理と行動規範の策定と普及に取り組み

ます。

3 その他

1) 職能、学術、そして政策の共立と再構築

日臨技の目的である臨床検査技師の制度・身分の確立および学術・技術の向上を基本とし、他分野からの参入を阻止して職域を確保し、新たな分野への拡大を行い、国民からの認知度向上と信頼を得ることに全力で取り組んで参ります。

また、政策の実現のためには、**日本臨床検査技師連盟との連立協調体制**が不可欠で、連盟の代表であり、国会議員、関連官庁および関連学会・団体と大きなパイプを持つ私が、当分の間は兼任でいきたいと考えています。そして、不在となってしまいました臨床検査技師である国会議員の誕生に向けて全力で取り組んで参ります。

2) JAMTから世界への発信

2026年のIFBLS世界医学検査学会の開催国に立候補し、10月にアイルランドで開催されたIFBLS年次総会に出席し、プレゼンテーションの成果により日本(幕張メッセ)での開催が決定しました。早急に企画運営を行い、“おもてなしの心”で成功裏に開催できるよう準備を進めていきます。また、協定を締結していますKAMT(大韓民国臨床検査技師会)およびTAMT(台湾臨床検査技師会)との更なる学術交流として共同研究の実現、現在の国際学生交流フォーラムに加え、新たに**国際若手検査技師交流フォーラム**を創設します。

また、JICA(国際協力機構)、ASCP(米国臨床病理学会)などとの連携をさらに強固とし、国際学会等への参加機会の拡充、英語会話力の強化事業を行い、**海外で活躍できる日本の臨床検査技師の育成**を行っていきます。

3) 生涯臨床検査技師構想の検討

現在、定年年齢が65歳に引き上げられ、更に70歳までの雇用が検討されています。他の医療職種である医師などは生涯現役であるが、多くの臨床検査技師が定年・再雇用後はリタイヤしています。そこで、元気でやる気のある臨床検査技師を中心に生涯臨床検査技師のための方策として雇用、ボランティア、役割などを検討していきます。

4) 現事業や制度の継続と見直し

現執行体制で実施している公益目的、学術・職能支援、政策生涯、組織強化事業と事務局体制を、新たな執行体制へスムーズに移行し、停滞することなく日臨技活動を行っていきます。

同時に、新たな執行体制の下で、新理事や各都道府県の意見や要望に耳を傾けながら、第4次マスタープランおよび現執行体制事業の検証を行い、継続、見直し、終了も行いながら、第5次マスタープランを

含めて公約しました新たな事業にも対応していきます。

以上の視点でお約束を果たすことが、私（長沢光章）に与えられた集大成の役目であり、臨床検査と日臨技への恩返しであると心得て、邁進してまいります。

なお、私の会長候補者立候補に際し、首都圏支部および関東甲信支部の1都8県の会長会議において推薦を受けております。

要旨にご賛同いただきご支援を宜しくお願い致します。

【職歴】防衛医科大学校病院検査部（1979～2007年）、東北大学病院診療技術部/副部長・臨床検査技師長・臨地教授（2007～2016年）、国際医療福祉大学成田保健医療学部医学検査学科/学部長・学科長・成田病院検査部長（20016～2023年）、国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健医療学専攻/専攻主任（2023～現在）

【賞罰】第31回緒方富雄賞受賞（2015年）、第52回小島三郎記念技術賞受賞（2017年）、厚生労働大臣賞受賞（2017年）、日韓功労賞受賞（2019年）

【日臨技委員歴】微生物検査研究班全国委員（1992～1993年）・全国班長（1994～1999年）、「医学検査」編集委員（2002～2008年）、The 32nd World Congress of Biomedical Laboratory Science（世界医学検査学会IFBLS 2016）副学会長（2016年）、その他各種委員会委員を歴任

【地臨技役員歴】社団法人埼玉県臨床検査技師会理事（2001～2002年）・副会長（2003～2006年）、一般社団法人宮城県臨床検査技師会会長（2010～2015年）

【関連学会・団体役員等歴】日本臨床検査技師連盟代表（2022～現在）、日本臨床微生物学会幹事・理事・副理事長・監事・第27回総会長（1989～2021年）、日本臨床検査医学会理事（2017～2022年）、日本臨床検査同学院理事（2018年～現在）、日本臨床検査振興協議会理事（2018年～現在）、日本臨床検査標準協議会ISO/TC212国内検討委員（2007年～現在）、国立感染症研究所協力研究員（2006年～現在）、厚労省JANIS運営委員（2007年～現在）、日本看護協会非常勤講師（2021年～現在）、その他

【推薦】日臨技関東甲信支部（林 和樹支部長）／埼玉県（神山清志会長）・茨城県（根本誠一会長）・栃木県（内田雄二会長）・群馬県（井田伸一会長）・山梨県（多田正人会長）・長野県（中山朋秋会長）、日臨技首都圏支部（杉岡陽介支部長）／東京都・神奈川県・千葉県臨床検査技師会、1都8県会長会議、他

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 代表理事副
会長

日本臨床検査技師連盟 代表

国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健医
療学専攻 専攻主任・教授

なが さわ みつ あき
長 沢 光 章

<原文をそのまま掲載しています>